

# 日本フェミニスト経済学会 2023年度大会趣旨説明

## 共通論題テーマ：フェミニスト経済学とローカリティ ——移動の自由と生き方の幅

共同座長 小川真理子（東京大学）

大野恵理（獨協大学）

2023年7月29日に開催された日本フェミニスト経済学会2023年度大会、共通論題のテーマは、『フェミニスト経済学とローカリティ——移動の自由と生き方の幅』であった。ローカリティ（地域性）は「生きる場所」という意味であり、生きる場所からくる制約、生きる場所を変える自由、強制された移動、選択した移動など、私たちが生きていく場と移動にかかわる問題をジェンダーと経済社会の視点から考えようとする試みである。今回の学会大会は、日本フェミニスト経済学会大会初となる、九州、福岡での開催となった。九州はアジアと地理的にも近く、歴史的な関係や交流もある地域である。九州から他の地域に移動した人、また他の地域から九州に移動してきた人の拠点という点で、国内外との移動にかかわる場でもある。このような観点から、本テーマにふさわしい登壇者4人とコメンテーター1人を国内外から迎えて共通論題をハイブリッド形式で開催した。

第1報告者は、大野聖良氏（お茶の水女子大学）の「在留資格『興行』とは何だったのか？——日本における『移住労働とジェンダー』を考える」である。「移動」に関して制度や政策面から、フィリピンと日本に焦点をあて、入管行政や興行に関して様々な角度から問題を提起した。第2報告者は、日下部京子氏（アジア工科大学・タイ）の「タイの移民労働者たちによる居場所作り ジェンダー視点からの考察」である。長年タイ及びアジアで調査研究に従事する日下部氏は、タイにおける移民の居場所に関わる議論、タイの移住労働者がかかえる問題等について報告を行った。第3報告者は、佐野麻由子氏（福岡県立女子大学）の「九州在住ネパール地域研究者の経験から考えた『移動の自由と生き方の幅』」であった。佐野氏は九州在住でネパール研究に従事している。その経験を通して「生き方の幅」について考えたこと、また、ローカリティについて理論的側面から考察をした。第4報告者の中島ゆり氏（長崎大学）は、「地元を離れない若者たち」というテーマで、大分県での調査をもとに、移動と居場所の観点から報告を行った。中島氏の報告から九州のローカリティに関する論点が浮き彫りになった。続いて、各報

告へのコメントは、堀内光子氏（公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム）が行った。堀内氏は、北九州市にある、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム理事長を2013年より務め、日本やアジア地域の女性の地位向上に尽力されている。同フォーラムは国内外で様々なジェンダー平等推進に関するプロジェクトを展開している。堀内氏からは、国連機関、大学、NGO等で、アジアの人間開発、特にジェンダー平等と子どもに関する業務に携わってこられた経験を通して各報告に対して的確なコメントをいただいた。報告後、質疑応答と全体での活発なディスカッションがあった。

本誌では、当日の発表をもとに、3人の報告者が書き下ろした論文が掲載されている。各人の論文の要約を以下に記す。

大野論文では、入管行政や招聘業界の機関紙分析により、外国籍女性エンターテイナーや「興行」をめぐる言説を紐解いた。「興行」の適応範囲の調整過程では、パターナリスティックなまなざしにより、一貫して女性たちの声が不在のまま議論がすすみ、労働者性がはく奪され、矮小化されてきたという。女性の移動をめぐる制度が、セクシュアリティの管理を伴いながら、いかに当事者不在のまま、政治的かつ法的に調整・形成されてきたかを指摘している。

日下部論文では、タイにおけるビルマ人移民労働者の居場所づくりのプロセスについて、労働局面や子育ての課題、ジェンダー問題に触れながら、滞在を確実なものとするために移民同士で結束し安全な空間やネットワーク形成がなされることが明らかにされた。ただし女性移民労働者にとっては、移住社会においても出身社会のジェンダー規範への適合を強いられることを意味しており、「自由と自律のトレードオフを強いる空間」でもあるという。

中島論文では、大分県における「地元を離れない若者」の事例分析から、地元に対する認識や場所に対するアスピレーション（向上心）が、社会的・空間的コンテキストの中でどのように決定されているかを検討している。個々のアスピレーションは、社会階層やジェンダー等によって異なって形成されることを明らかにしたが、そもそも地方の若者には、「地元を離れる未来を想像したことがない」ほどに社会的資源が制限されているという根源的な問題も指摘された。

各論文の精緻な分析を通して、ローカリティ、移動、居場所についてあらためて深く考える機会をいただいた。なお、今大会を盛会のうちに終えることができたのは、実行委員長の徐阿貴氏（福岡女子大学）のご尽力によるところが大きい。また、九州内外、海外から参集してくださった、5人の登壇者をはじめ、当日の参加者、運営を担った学会関係者にこの場をかりて心から感謝したい。